



今年2月に開催された夕張国際ファンタスティック映画祭の様子。市内の8カ所で作品を上映した



夕張市役所を訪問した際は、石炭採掘時のメタンガスを発電に利用できないかといった石炭の可能性についての質問も上がった

# 産業都市の



映画祭プロデューサーの澤田さん。有名な映画の看板を設置するなど、映画を生かしたまちづくりに奔走中

人口が1万人を切った。もう一度、夕張市を笑顔であふれる街にしたい。今年からは、全国ブランドとして有名な夕張メロンを台湾と香港に輸出し始め、夕張のゆるキャラとして人気の「メロン熊」などを活用しながら、全国に向けても積極的にPRしている。

また、元東京都職員の鈴木直道市長自らが企業誘致に力を入れ、製菓メーカーなど、東京や横浜などの企業が少しずつ進出を始めている。新千歳空港や苫小牧港、県庁所在地の札幌にも車で約1時間という立地が魅力だ。

その現状を聞いた研修員たちは、「夕張には豊富な石炭が眠っている。資源を活用して化学製品を作ってはどうか」「夕張の自然の豊かさに感動した。ここに日本の伝統的な家屋が並んでいたら、観光客の目を引くのではないかと、次から次へと意見が上がった。押野見さんは「実際に夕張を見て感じてもらうことで、私たちとは違った視点からの意見を聞くことができます。それは夕張市にとって大きな収穫です」と話す。

夕張市の活性化に向けて、市民も動き出している。その代表的な取り組みが、夕張国際ファンタスティック映画祭だ。90年から市が運営していたが、財政破綻で存続の危機に。映画の街を守りたいと市民の手で続けられ、今年2月で24回目を迎えた。

「なぜ夕張で映画祭なのか、不思議に思いませんか？」

そう研修員に問い掛けたのは、夕張市民で映画祭プロデューサーを務める澤田直矢さん。炭鉱が栄えた最盛期、市内にはなんと17もの映画館があった。その伝統を受け継いだこの映画祭は、国内外の多彩な作品を上映し、今年には1万4000人が来場。「『キル・ビル』で有名なクウェンティン・タラントイーノ監督など、この映画祭での上映をきっかけに世界的に評価された

監督も多い。映画界の人材を発掘する場として継続し、夕張の名前を世界に広めるきっかけにもしたい」と語る。

アルメニア経済省のゲヴォルギヤン・コリアンさんは、「夕張のように新しい産業や市場開拓に目を向けて、地域活性化に取り組みむ必要性を実感しました」と話す。中央アジアの国々には共通の課題が多いが、これまで地域振興に携わる行政官同士が集まる機会にはほぼなかったそう。「お互いの成功例や失敗例を共有できれば、効率的にそれぞれの取り組みを進められるはず。これからのネットワークを大事にしたい」。研修員たちはそう口をそろえた。

夕張市の経験を、中央アジアの地域づくりに生かす。地域振興に奮闘する夕張市での学びが、新しい未来をつかむヒントになったはずだ。



石炭博物館では、日本で唯一、実物の坑道や採掘現場を見学できる

# 過去から学ぶ

かつて炭鉱の街として隆盛を誇った北海道夕張市。現在は観光や農業など、新たな産業振興の道を模索している。その経験を共有し、新しい地域開発の手法を探るため中央アジアから研修員が訪れた。

[ 北海道 ]

夕張市



## 北海道夕張市

面積763.20km<sup>2</sup>。人口約9,970人。気温差が大きい気候を活用して作る夕張メロンは、全国的な知名度を誇る。炭鉱の街として日本の高度経済成長を支えたが、閉山により人口が激減し、2007年に財政再生団体に。海外からの視察受け入れなどを通じて外からの意見も取り入れながら、地域活性化の道を模索している。

## 過去を乗り越えて 新たな一歩を

新千歳空港から1両のローカル列車に乗り込んでしばらく走ると、車窓に広大な農地が広がった。約2時間かけてたどり着いたのは夕張市だ。

街を歩くと、所々に空き家があるのが目に付いた。夕張市はかつて、20以上の炭鉱を抱えた日本でも有数の石炭の産地だった。戦後の高度経済成長を支え、ピーク時には炭鉱の労働者やその家族で約12万人もの人々が暮らした産業都市だ。しかし主なエネルギー資源が石炭から石油へと転換したことから、1990年、約100年続いた夕張の石炭産業は幕を閉じた。

「私の国にも産業を炭鉱に依存している街があり、夕張市の取り組みに興味があります。そう話したのは、タジキスタンのトゥルスンザデ市上級法律官のフドヨロフ・フィルダウスさん。7月上旬、北海道の地域開発を学ぶJICAの研修の一環で、中央アジアの研修員たちが夕張市を訪れていた。

夕張市まちづくり企画室の押野見正浩さんは、「炭鉱から観光へ」をスローガンに、ホテルやスキー場などの観光施設に投資しました。結果的にそれが市の財政を圧迫する一因となり、2007年に財政破綻しました」と説明する。2025年までに返済しなければならぬのは353億円。水道や福祉、医療など、最低限の行政サービス以外は予算が激減し、2013年には



夕張市内の石炭博物館を視察する中央アジアの研修員たち。炭鉱の歴史を貴重な観光資源として活用している